

---

# ロジカルキューブは回り出す

白鳥準

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロジカルキューブは回り出す

### 【Nコード】

N6222S

### 【作者名】

白鳥準

### 【あらすじ】

論理的な考察、しっかりとした観察、類似例の経験則。ルービックキューブから始まった二人の奇妙な関係。凍りついたロジカルキューブは、その時再び回り出した。

**（前書き）**

大学提出用。後書きを必ずお読みください。

十年。

それだけの月日が流れれば、変わるもの、変わらないものがはっきりと目に見えて分かってしまう。これは、ロジックでも無ければある種の経験則でもない。私自身が感じる、何か。

肌寒い季節。大晦日を過ぎた辺りに、高校の同窓会の知らせがきで届いた。差出人の名前はクラスの委員長だった人でもなければ、私と親しい人でもなかった。同じクラスでも二度三度言葉を交わした程度の仲。彼は幹事をしているらしい。昔、丸い縁の眼鏡でいじられていた、ガリ勉な男の子だったような気がするが、こうして幹事を務めるほどになった。私は、はがきからしてもう、過去と現在がまったく違うものだということを認識せざるを得なかった。

ズレ、みたいなものを感じる。周囲と自分の、小さな断層。

高校を卒業してから、私はそれなりの大学へ進学し、それなりに厳しい就職活動を終えてそれなりの企業へ入社した。

時の流れ、とはよく言ったものだと思う。実際にここ数年間を言葉にするならば、まさに流れていた、流されていたというのが最も当てはまるものだと思う。それほどまでに、私の時間は弛緩し、四肢を投げ出すような日々を送っていた。

だから、同窓会は私にとって、変化のきっかけのようなものを探す良い手段だった。

当日の朝、いつも会社に行く時よりも若干薄めの化粧を乗せる。私服でとのことだったので、出来るだけ明るめの服装を選ぶ。髪の毛をセットしながら、鏡を見る。十年前は、自分の顔を鏡でまじまじと見たことなんて無かった。美人だとも思わないが、そこまで自分に自信が持てないわけでもない。だが、そもそも自分の外見について考えたこともなかったように思う。

ただ、もしも十年前のあの日に、少しでも自分に自信が持ててい

たら。

自分の容姿がそこまで悪くないんじゃないかと、嘘でもいいから考えることが出来たのなら。そんなことを考える時がたまにある。

会場は地元でも有名なワイン工場施設にある、大きなレストランだった。集合時間は午後六時。施設内はライトアップされ、工場自体が大きな城のような建物なために、とても幻想的な光景が作り出されている。会場に到着するまでに数人の同級生と話したが、みんな一目では分からないくらい変わっていた。逆に言えば、声をかけたきた旧友たちは、私のことが一目で分かるらしい。

砂利道を進んで、レストランに到着した。中で受付をしていたのはクラスでも人気の高かった男の子と、当時彼と付き合っていたのではないかと噂されていた女の子だった。名前は知らない。受付の二人に名前を告げて、参加費三千円を払う。楽しそうに旧友達の顔を見るその様は、あの頃から何も変わってはいない。けれど、やっぱり彼らともズレのようなものを感じた。

会場には既に数十人が集まっている。全一二七名が集まる同窓会らしい。時計と携帯電話をいじって数十分が経ち、司会進行役の子が前で乾杯の音頭を取る。適当に周りの人とグラスを合わせ、張り付くような笑顔を浮かべながら私はその時間を過ごした。

しかし、三十分も経てば私は孤立した。そもそも友達の多い方ではなかったのだ。声をかけてきてくれた同級生たちも、ある種の物珍しさが理由だろう。あの頃の私だったら、間違いなく出席しなかっただろうから。

やっぱり、ダメかもしれない。

変わろうとしても変わらない。頑張ろうとしても頑張れない。

十年前のあの日と同じ、クラスの中で一人だけ浮いていて、建前も本音も持ち合わせないロジカル思考な私。あの輪に入っていけたらと、そう思うことすら放棄して、世界の真理でも見つけたかのように数字と法則を大事に抱き続けていた。

会場の端にある椅子に腰掛け、私はポーチからあるものを取り出

した。

ルービックキューブ。美しい立方六面体のパズルゲーム。

私がおかから逃げようとする時は、いつもこれに頼っていた。いや、「いた」というのはちょっと違うかもしれない。こうして、律儀に同窓会の席にまで持ち込んでいるのだから、今でも立派な依存者なんだろう。

カチ、カチと音を立てながら、色を揃えていく。昔ほど速く解けなくなってしまうたが、それでも指が、頭が解法を覚えていく。

……覚えていく。

高校二年の春。私は、好きだったパズルを投げ出してまで解きたい問いがあった。その時、自分に解けないものはないのだと愉悦に浸っていた私にとって、その問いは大いに私を悩ませた。

『ねえ、——の好きなものは何？』

まだ三十路にも到達していない女が言うのもなんだが、若かったのだと思う。とにかく必死だった。分からないものを目の前にして膝を折ることだけは許せなかった。もう、ロジックも何もあったものじゃない。私は馬鹿の一つ覚えのように好き嫌いをしつくく聞き出し、結果、どの答えにもたどり着けなかった。

あの時分からなかったものは、二つあった。そのうち一つは解明することが出来た。時間も、考えも必要なかった。ただ、理解するタイミングが遅かったただけだった。

もう一つは今でも分からない。好きな食べ物、好きな芸能人、好きな色、好きなタイプ。エスカレートしていけば寝る時間にお風呂で一番最初に洗う身体の部位まで知っているのに、それでも、分かんなかった。いや、聞けなかった。

——そうか。

どうして、私がこんなところへ来たのか。変化、そうだ。変化を求めに来たと思っていた。でも違う。似ているようで、ちよつと違う。

あの時、得られなかった答えを、私は探しに来たのだろう。

そんなことに気づいてしまったからだろうか。私はルービックキューブを指先で弾きながらも、視線は会場へと戻っていき、人が右往左往するように目をきよろつかせた。

豪勢な食事と、談笑する元クラスメイト達。そして、ルービックキューブをいじる私。

違う。やはり違う。ここと、彼らのいる場所は。

私の手の中で踊る、約四京という数のパターンを持つ世界。対して、∞という数を持つ彼らの世界。どちらが上位なのかなんて、考えるまでもない。

もう、帰ってしまおうか。私は顔を伏せて、まだバラバラのルービックキューブに視線を落とした。ここへ来たのは何かの間違い、そう思えば、今日の出来事はすっかり忘れられる。

そうだ、忘れてしまおう。全部、きれいさっぱり。

「——りこ」

人の笑い声に混じって、私の耳に確かな声が届いた。それは、とても懐かしく、頭を撫でられるような、穏やかな気持ちにさせるものの。

「——りこ」

りこ。理子。雛崎理子。ひなざき りこそれは、私の名前だった。すべてのクラスメイトが「雛崎さん」と私を呼ぶ中で、「理子」と私を呼ぶのは、記憶にある限りたった一人しかない。

私は顔を上げて、その声の主を探した。

「えーいち、君」

一目で分かった。あの頃とは髪型も眉毛も違うけど、それでも一発で分かった。何故かスーツに身を包んだ彼は、私のところへ近づいてくる。

彼は、一言で言えば馬鹿だった。きつと、はがきをまともに読まずに来たのだらう。私服着用って書いてあったのに、彼はスーツで来たのだ。

だから、そんな彼の姿に、私は胸を打たれてしまったんだと思う。

「やっぱり理子だった。探したぜまったく、こんなところにいるなんて……ってちよっと、何泣いてんだよ」

涙が止まらなかった。人が沢山いるのにも関わらず、今まで押さえつけていた堤防が決壊したかのように、涙が出ていた。掌に涙を落とし、ルービックキューブにも涙を落とし、辛うじて声だけはギリギリのところで抑えて、でも、顔は上げたままで。

「久しぶり」

「えっ……？」

「久しぶりって言ってるの。それとも、どこかで私と会った？」

「そんなわけないだろ。ていうか話は後だ理子、化粧が……」

「何よ。私が化粧してたら変だって言うの？」

「違う違う。なんか知らんが泣いたせいで化粧が崩れてるぞ」

頬を触ると、涙の色が若干濁っていた。マスカラが溶けて流れてきたのだ。見なくても分かる。今の私はかなり酷いことになっているだろう。想像をして、なんだか笑えて来た。笑ってしまったせいで、涙も、声も止まらなかった。

「もう……最悪……っ」

ついに私は、顔を隠し、膝について崩れ落ちてしまった。きつと会場の中にいる何人かは気づいたことだろう。でも関係ない。止めようとしたって止められないんだから、どうしようもない。

とあるルービックキューブから、カチツと音がした。今まで硬くて動かなかったパズルが、一つ動き始めた。そんな気がした。

難解な式で描き続けた私のロジックは、急速に解へとたどり着こうとしている。

だから私は、もう一度顔を上げて、そして――。

退屈だった。

高校も二年に上がり、一ヶ月が過ぎた。それなりにクラスメイトの顔も覚えてきたし、たまに駄弁るくらいの友達も出来た。一年の頃に仲良くなった奴らが全員違うクラスになってしまったのが痛かったが、なんとかやっていけそうだと、そんなことを思い始めた頃。原因はきつと、席替えの時に窓際、一番後ろから二番目の席になったことだと思う。窓際というのはどうにも苦手だ。居心地が良すぎる。天日が入り、ほどよい風が吹く。ここにいると、むさ苦しい男連中と絡んでいるのが嫌になってくるくらい、居心地が良い。そんなんだから、俺は次第に友達と絡むことも少なくなり、たった、ほんのたった一ヶ月で孤立するような形になってしまった。

正直、どうでもいい。どうでもいいが、暇で仕方が無い。

授業中にゲーム機をいじるほど度胸も無かったから、適当に書店で買ってきたクロスワードパズルをやることにした。何故そんなものを買ったのかは良く分からない。ただ、何かを作り物をするほど継続力も無ければ、本を読んで過ごすような趣味も無かった。だからというわけでもないが、クロスワードパズルはこれが結構に面白く、知らぬ間に俺ははまり込んでいた。

そのうちヒートアップしていつて、ルービックキューブとやらに手を出し始めた。これが、俺の最初の間違い。六面すべての色を合わせれば良いだけなのに、一向に出来る気配が無い。これはどういう風に動かせば進むのか、一面合わせるだけでは全く答えに近づいた気がしない。

こいつは無理だ。俺には出来ない。

と、そう考えて諦めれば良かったのに、無駄な意地を張って挑戦し続けたのが、二つ目の間違い。

登校してからHRまでの余った時間にルービックキューブに挑戦していた。クラスの奴らが「おはよう」と挨拶を交わす中、俺は一人正方形のパズルに熱中していた。勿論、進歩は無し。ただ闇雲に

動かしているだけじゃ出来ないってことは分かっているが、かと言って何か打開策があるわけでもない。つまり、手詰まりになっている。

「ダメだこりゃ……」

俺はルービックキューブを机の上に放り投げた。一面、とりあえず一面合わせてみようと思ったのに、それすら出来ていない。パズルには達成感がある。そのために今まで試行錯誤をしてきたが、もうそれも面倒くさくなってきた。椅子に深く腰掛けて、足を投げ出した。

窓の外を見ると今日も晴れ。一日はつつがなく進行中だった。

「ちよっと、貸して」

「ん？」

頭の上から声がして顔を向けると、女子が俺を見下ろしていた。整った顔立ち、長い髪の毛、すつと線を引くような輪郭、中々好みの顔をしている。しかし、こんな奴クラスにいたっけかな、と考えているうちに、そいつから細い腕が伸びてきた。

「ルービックキューブ」

「ああ、別に良いけど。出来るのか？ 結構難しいぞこれ」

「こういうのは得意だから」

言って、ルービックキューブをいじり始めた。

「つつてもHRまで五分も無いぞ」

「何言ってるの。ルービックキューブっていうのは、そんな長いタイムでやるものじゃないよ」

「長いつて……」

その瞬間、俺は信じられないものを目の当たりにした。ルービックキューブが変形でもするかのように高速で回転し、色を変えていく。そいつの手つきはキューブを動かすというよりも、弾くと言ったほうが正しい。その細い指に翻弄されるようにキューブは回転する。

トンツ、とキューブを机に置いた。綺麗な六面体。青・赤・緑・

黄・白・橙。揃っている。俺は黒板の上にある時計を見た。確か、HRまで五分無かったくらい。分針は一つだけ先に動いたように見える。

多分、一分経ってない。

「ねえ、パズル、好きなの？」

「えっ……？」

呆然としていた俺に、そいつはそんなことを聞いてきた。一分でルービックキューブを解いたことには、何も触れない。まるでそれが当然かのように、彼女は意識をそこから完全に外していた。

「クロスワードとか解いてみたいんだけど、パズル好きなのって聞いたの」

「いやまあ、好きか嫌いかで言えば好きだけど……」

「ふうん……」

腕を組んで、こちらを覗き込むように顔を近づけてきた。容姿が悪く無いだけあって、顔に血が上るのが分かった。若干身を引いて、そいつを睨み付けた。

「な、なんだよ……」

「好きか嫌いかで言えば、好きな方かな」

「はあ？　つか顔が近い、離れてくれっ」

「あ、ごめん……」

余裕の表情で近づいてきたから慣れているのかと思いきや、意外にも済まなそうな顔をして俺から離れた。

「えっと、その……」

今度は視線を右往左往させて、何か言葉を探しているようだった。俺はフォローするために色々考え、結果キューブを手を取った。

「しかし凄いな、こんな速く出来るもんなんだなこれって」

「あ、うん。コツを掴んで慣れれば意外と」

「やっぱ法則とかあるのか？」

「ある。無きゃこんな速く出来ない」

そりゃそうだ、俺だってそれを見つけ出すのに必死だったんだか

ら。

女子はキューブをまた手にとって、適当に回転させ始めた。折角綺麗に揃っていた色柄がバラバラになり、こいつが解いてしまう前の形に一瞬にして戻った。

「パズル好き、なんだよね？」

「まあ……」

好き、ってほどでもないが、一応頷いておく。

「じゃあ、今日からともだち」

「……は？」

そいつの方を見ると、ものすごい真顔で俺を見ていた。冗談だろ、なんて言葉は冗談でも出てこなかった。

「私は雛崎理子。趣味はパズル。どちらかというと論理的な人間」  
聞いてもいないことまで紹介してくれた。しかし、論理的な人間というのは嘘だろう。（自称）を付け忘れている。論理的な人間が初対面の相手に対して友達だのなんだのと言ってくるわけがないし、そもそも友達なんていう概念的なものを信じるような思考回路じゃないだろう。

「待て待て、意味が分からないぞ。論理的な人間なら説明してくれ、  
という経緯でそんな話になった」

「私、パズル好き。君もパズル好き。つまりともだち」

宇宙でも生まれそうな理論だった。いや、趣味を共有する友達がほしいというのは分からないでもない。だが、この廃れた現代でわざわざ「友達になろう」などと言葉にして始まる友人関係なんて聞いたことが無い。よほどに不器用なんだろうか。

とりあえず、断る理由も無い。こんな偶然で女の子の友達が出るのなら、むしろこちらから喜んで手を取りたいくらいだ。

「俺は、はなだえいいち花田栄一。趣味は……今はパズルなのかな。どちらかという馬鹿の部類に入る人間」

「知ってる」

一蹴された。どうにも絡みづらい奴だった。

「それはいいんだが、そろそろHRだぞ。クラスに戻らなくて良いのか？」

「戻るも何も、ここのクラスよ私」

「あ、そう……」

同じクラスだったらしい。ちょっと失礼な事を言ったかもしれないと思いつながら、雛崎のほうに気にした様子が無かったので、俺もあえて謝らなかった。

HR開始のチャイムが鳴る。午前八時半。俺は登校してきた八時十五分辺りからこの一瞬までで、一人の女友達を作ってしまったらしい。外見は良好、喋りはちょっと難あり、趣味は似ているようでレベル違い。ルービックキューブの達人。自称論理的。クラスメイト。雛崎の要素を挙げるとこんな感じだろうか。悪い気はしない。窓際族としての平穩は崩されることになるだろうが、退屈だった日々に少しでも色がつけばいい。

そんな風に軽く考えていたのが、最後の間違い。

雛崎は「じゃあまた後で」などとそれっぽい別れ台詞を吐いて、俺の横から姿を消した。同じクラスなのだから、どこかで見たことはあるはず。というか、「雛崎」なのだから、一番初めに名前の順で席に座っていた頃、「花田」である俺のかなり近く、下手すりゃ後ろか前にいた可能性だってある。喋ってみるとアレだが、結構に影の薄い奴なのかもしれない。

俺は雛崎がどこにいたのかを知るために、彼女の行き先を追った。

ガタツ、ギイイ……。

「……」

「……」

俺の後ろの席だった。

■

雛崎は「ともだち」という言葉が存在しない世界に生きてきたのか、明らかに友達を履き違えている節があった。休み時間にだべったり、昼ごはんと一緒に食うところまでは良い。一緒に帰宅するのも少し恥ずかしかったが、これも間違っちゃいない。同じパズルの早解き競争など、我ながら微笑ましい友人関係だとも思う。

だが弁当はどうだ。これは何かが違う。購買部に焼きそばパンを買いに走らされるならまだしも、雛崎が俺の分の弁当を作ってくるのは明らかにおかしい。雛崎曰く、

「同じ釜の飯を食らうのが友達って聞いたことがあるけど」

という言い分。なるほど、確かに同じ釜の飯を食うことにはなっている。しかし、これを俺は受け取らなかった。気恥ずかしかったというのもあるし、これが明らかに「カノジョ」とやらがする行為だと俺は知っているのに、多分雛崎は知らない。騙しているわけじゃないが、何か申し訳ない気がしてならなかった。

自分の分はあるからいらない、と可愛らしい包みに入った弁当箱を押し返した時、雛崎がやけに傷ついたように視線を落とした。

「そうか、そうだね。何やってるんだろ私」

「いや、えっと、感謝はしてるぜ？ でもなんつーか、それは違うだろ友達として」

「違うの？ 同じ釜の飯……」

「それはさっき聞いた」

購買で朝に買ってきたクリームパンを頬張りながら、オレンジジュースにストローを刺した。

「弁当は、あれだ、恋人とかがやることだろ多分」

「恋人……愛情表現ってこと？」

「ん？ まあ、そうなのかな」

この世に生を受けてからこのかた、幼稚園の運動会くらいでしか母親の弁当を食べたことがない俺に聞かれても若干困る間이었다。別に、不満があったわけじゃない。母親は料理が致命的に下手で、

作る事を避けていたのを知っている。だからそういう行事のあるときは、毎回弁当屋さんにちよつと豪勢な弁当を作らせて持ってきていた。だからというわけでもないが、愛情表現などと大仰な言葉に置き換えていいのか、俺にもよく分からなかった。

雛崎は受取人のいなくなった弁当箱をしばらく見ていたが、何か納得したのか、箱をスクールバックの中に仕舞った。

「じゃあ、持ち帰る」

「おう……」

針の先で突つつかれるような罪悪感を覚えた。悪い事をした覚えは無いが、受け取ってやつてもよかったかもしれないと、今更ながら後悔が募った。

「問題」

自分の弁当箱を出して、ふたを外した。中には色とりどりの食材が詰まった、美味そうな料理が並んでいた。

「この中で、私の好きなものはなんでしょう」

「はあ？ そんなもの分かるかよ」

そう言うのと、むつとしてこちらを睨んできた。

「論理的な考察、しっかりとした観察、類似例の経験則、考えれば分かることだよ」

「んなこと言われても……」

勿論、俺は雛崎の好きな食べ物なんて知らない。経験則、なし。

弁当箱の中を観察してみる。小さめの弁当箱の半分を占めているのは白米。まさかこれが好物というわけはないだろう。確率的に有り得ない話じゃないが。おかずを見る。端から順にプチトマト、何かのコロッケ、ミートボールが二つ、若干大きめの卵焼き、きんぴらごぼうである。いい感じに肉野菜が分かれている。

「妥当に行けば、この一番大きい卵焼き、か？」

「はずれ。というより、それは花田君の好きなものでしょ」

「あれ、俺お前に好物って話したことあったっけ」

「私がお弁当を食べているとき、卵焼きを口に運んだ瞬間だけこち

らに視線が向く事が多かった。観察の結果」

「左様ですか……」

パズル大好き人間なだけあって、異様な観察眼だった。自分でもそんなこと意識した覚えはないのだけど。

「で、選択肢が一つ減りました。もう一度だけチャンスをあげる」

外れた卵焼きを口に運び、弁当箱をこちらに押し付ける。しかし、どれだけ観察しても好みを見分けることなんて出来なかった。大体、どういう観察の元ではじき出される答えなんだそれは。

「こ、コロツケ」

「理由は？」

「美味しそうだから……」

雛崎の呆れたような視線が突き刺さる。

「正解はプチトマトでした」

「分かるかよっ!？」

「分かるよ。良く見てみて。きちんと解を導き出せるように細工してきたんだから」

プチトマトを見てみる。真っ赤で丸い。思考放棄。

「お弁当のおかずってというのは、作るときに全部決まっているわけじゃないの。作りながら、どういうものを入れていこうかって考えながら作るの。卵焼きは花田君が好きだっていうことが分かったから直ぐに作ったけど、ほかは結構適当」

「え、そうなの？」

「そうよ。何かおかしい？」

「いや、別に……」

益々先ほどの弁当を受け取らなかったことへの後悔が襲ってきた。もしかして、俺ってば凄いことをしてしまったのではないだろうか。「結構ぎゅうぎゅうに詰めちゃうのがお弁当の一般的な形。よく見れば分かるけど、このお弁当は『入れた料理の順番』が分かるようになってるの」

「なる……ほど?」

一瞬じゃ分からないが、確かに言われてみれば。紙皿に入っているきんぴらがぼうが恐らく最初。問題はその後。よく見れば、料理同士がドミノ倒しのように重なり合っている。つまり、ドミノの下のほうにあるものが、入れた順番で言うところの早いほう。するとプチトマト、コロッケ、卵焼きの順番に入れたことになる。

「プチトマトは普通、大抵の弁当で一番最後に穴埋めみたいな感じで入れるもの。コロッケの下に重なっていることなんてほとんどない」

「つまり、トマトが一番好きなものだから、最初に入れた、と？」

「そう。ついでに言うておくと、そもそも弁当箱を見て「私の好きなものはなんでしょう」っていう問いが既にヒント。普通に考えたら花田君の言う通り分かるわけがない。でも、私は考えれば分かって言った。そういう仕掛けがしてあるんだって、ヒントを与えたのよ」

「……納得しかけたけど、ぶっちゃけ無理だろ大体、卵焼きのサイズが明らかにほかと違うだろこれ。ブラフか？」

「言ったじゃないさっき。花田君が好きなものだって分かってたから作ってたって」

「いや、そりゃそうだけど、俺の分の弁当も作っただろ？　じゃあ関係ないだろ」

「好物は多く食べたくなるものでしょ？　違うの？」

俺は言葉を失った。そりゃ、そうだ。好きなものなんだから多く食べたいと思つて当然だ。何も間違っちゃいない。でもそれは、俺のことであつて、雛崎のことじゃない。

何だ？　つまりこいつは、俺の分の弁当を用意しておきながら、さらに俺が卵焼きを求めてくるのを予想して自分の分にまで多く入れたと？　意味が分からない。何の理由があつてそこまでされなきゃならない。

「……負けだ負け。そうだな、俺の観察が足りなかった」

「精進すること」

「がんばります」  
なんだってんだよ、全く……。



FILE：実験その1 「×××

「えーいち君」

「……………」

「えーいち君」

「……………なんだよ」

慣れない呼び名で、雛崎が後ろの席から俺を呼んでくる。一体どういうつもりか知らないが、遊ばれていることだけは間違いないので、わざと気だるそうに応えた。

「私の名前は雛崎理子」

「知ってるよ。だからなんだっつーの」

「これから私のことは理子って呼んでいいよ」

「何で」

「実験。試行錯誤みたいなもの」

飄々とそう答えた。

最近の雛崎は、こういう「実験」と称してよく俺に協力を求めてくる。実験の全貌は話してくれない。ある種の気味の悪ささえ感じる。今回は呼び名、苗字ではなく名前で呼べと言ってきた。雛崎が天然という分類の人間であることは結構前から気づいていることだが、ここまで来ると実は天然の皮をかぶった悪魔か何かなんじゃないかと勘ぐってしまう。

女の子に苗字じゃなくて名前で呼んでいいと言われて、勘ぐらない男子がどこにいる。だが、相手はあの雛崎である。多分、「実験」

というのはまんまの意味なんだろう。それが何なのかを知る術は無いが、期待するだけ無駄だ。

「なあ雛崎。お前に常識って言っても無駄かもしれないけど、言わせてもらうぞ。普通、人の名前の呼び方を変えたりなんかしない」「でも、私の思考実験の結果では、そっちのほうが友達っぽかった」「変わらねえよ。クラス男子を見てみる、名前で呼び合ってる奴もいるけど、苗字で呼び合ってる友人関係だって普通にある」

「前の弁当の件でもそうだったけど、えーいち君は深く考えすぎ。確かにあれは、なんていうかやりすぎだったかもしれないけど、いいじゃない、そういう友達の形でも」

「友達の形、ねえ……」

そっというのは、きっと友達とは呼ばない。違う何かになってしまふ。雛崎はそのことに全く気づいていない。頭を抱えなきゃならぬのはいつだって俺である。こいつはより俺と親密な「友人関係」を求めているだけだ。曰く思考実験で、そっちのほうがしっくりきたから、今からそちらに変更しよう、とそう言っているだけ。

「雛崎にとって、友達ってのは一体どういうもんなんだ？」

「え？ そりゃあ、なんていうか、一緒に色々なことが出来る人っていうか、色々なことをしようと思える人、みたいなのかな……」

「それと名前を呼び合うことは関係なくないか？」

「……」

黙りこんでしまった。何か正当な理由を探しているんだろう。そしてそれは、多分俺を納得させるに足るもの。自称論理人間だけあって、言うことの筋は毎回通っている。だからこそ悪質。幼い子供の言うことだって、筋は通っている。でも、それを納得する事とはまた別問題。言葉の意味が正しければ良いってもんじゃない。ただ、相手はとてつもなく頑固で、結局こちらが折れなければならないのだ。

「分かった、分かったよ。呼べばいいんだろう、呼べば。でもただじゃダメだ。これやれ」

机の引き出しから、一冊のノートを取り出して渡した。

「数学のノート？　もしかして、また課題やってこなかったの？」

「仕方ないだろ、分かんないんだから」

「パズルと同じだよこんなの。法則とコツが分かれば難しいことなんて何も無い。それに、こういうのは自分でやらないと分からないままだよ。六面綺麗に揃ったキューブだけ見たって、どういう風にそうなったのか分からないと意味ないでしょ？」

「雛崎。これは条件だ。御託はいらない。やるなら俺はお前を名前で呼ぶ。やらないのならこのまま雛崎のままだ」

「……分かったよ」

しぶしぶといった様子で雛崎はノートを受け取った。こうして雛崎に数学の課題をやらせるのは何回目だろうか。正直、反省はしている。しかし解けないものは解けない。知恵の輪程度だったら楽勝になつてきた俺の論理思考回路も、一般常識の前では崩れ落ちるというわけだ。

「さ、じゃあ呼んで」

「え？」

「え、じゃないでしょ。条件は満たしました。私のことを理子って呼んで」

「こついうのは自然と出てくるもので、確認とか強要するものじゃないと思うぞ」

「呼ばないとやらないよこれ」

何故だろうか、知らない間に攻守が逆転していた。

「……やっぱ返せ、自分でやる」

「イヤ」

「雛崎、これは死活問題だ。数学のハゲ教師の恐ろしさをお前も知っているはずだ」

「だから何？　私はきちんと課題やってきてるもん」

「くっ……」

呼ぶしかないのか。妙に期待に満ちた目で雛崎がこちらを伺って

いる。イニシアチブは完全に相手に握られている。というか、取り返したところで課題は終わらない。

思考実験。りこ。りこ。りこ。りこ。りこ……。

何も難しいことはない。むしろ文字数が二文字減って呼びやすくなったと考えればいい。恥ずかしがってはいけない。むしろ、崖から飛び降りるように、一気に行けばいい。深呼吸は一度、それ以上は厳禁。

すう、はぁ……。

「理子」

「……………」

「よ、呼んだぞ」

「えーいち君」

「……なんだよ」

「うん、やっぱりこっちのほうがいい。思考実験の通り」

「……………」

雛崎から視線を逸らし、机の引き出しから無理矢理クロスワードのパズルを引っ張り出した。まだ半分も解かれていないもの。どこまでやったっけ。どこまで……。

……ふざけてやがる。一体どんな思考実験を行って、どういう結果に辿り着いたのかは知らない。でも、本当の友達だったら、今は笑い飛ばすところだろ。何か、ちょっとした不自然さを感じて、互いに「おかしいな」と笑い合うところだろ。なのに。なのに。

雛崎は確かに笑った。でもそれは、声を上げるような笑いじゃなくて、本当に楽しい事を噛み締めるような微笑み。思わず、俺のほうも赤面してしまうような、嬉しそうな笑顔を見てしまった。

一体、雛崎はどんな実験をしているのか。何の解を導きだそうとしているのか。

分からない。俺は、こいつが分からない。

理子は納豆が嫌いらしい。

こんな一体どこで役に立つんだと思うような情報を手に入れたのは、理子の「実験」とやらに付き合っている時だった。卵焼き以外に好きなものはないか、と聞かれたとき、俺は納豆と答えた。するとどうだろう、露骨に理子は嫌そうな顔をした。確認は取っていないが、恐らく納豆は食べられないんだろう。嫌がらせのネタとしては優秀だ。

理子の最近の流行は「好き嫌い」にあるらしい。試練のように襲い掛かる理子の「実験」にはもう慣れてきた。大体、逆らわなければ別に面倒も起きない。適当に流してやるのが一番楽でいい。

しかし。しかしだ。食べ物やテレビ番組などの日常的なものならば構わない。だが、常識知らずの理子がヒートアップすると、もちろんそんな生易しいものでは済まない。

「えーいち君。この中だったら誰が好み？」

「……………」

言って、理子はグラビア雑誌を俺に向けてきた。水着を着た女の子が数人、それぞれポーズを取っている。高校生にもなつてそんなもので恥ずかしがる精神は持ち合わせていないが、この青さを分かち合っているのは理子である。女子だ。いや、女子とグラビア雑誌と一緒にいるという青春が世界にないかと聞かれれば、恐らくそういうものもあるだろう。だが、女子だ。答えに窮する。というかセクハラだろこれ。

「何、この中にはいないの？ この子とかどう、胸おっきいけど」

「理子、お前は俺に嫌がらせがしたいのか？」

「なんでそうなるのよ。ただ単純に好みを聞いているだけじゃない」

「……まあそうだけどき。そんなこと知ってどうするんだよ」

「どうするもないよ。今こうして聞いていることが重要な」

「また、実験てやつか？」

「そう、よく分かつてるじゃない」

相変わらずこれである。実験の全貌は、実験が繰り返されるたびに迷宮の奥へと進んでいく。まったく一貫性が無い。一時期は考え、てみようとしたが、もう諦めた。多分本人にしか分からないちよつとした結果が出ているんだろう。これで成果なしとか後日に報告された日には、俺の我慢は水泡と化す。どうせなら付き合ってやるか、というのが最近の考え方になってきている。

「水着じゃあなあ……俺はなんていうか、大和撫子系っていうの？物静かな子が好きなんだよ」

「じゃあ、この子とかは？」

写真の中で、一番地味そうな水着を着ている子を指差した。

「まあ、その中じゃ好きなほうかな」

「ふうん。胸小さいけどいいの？」

「お前は俺に胸の好みを聞きたいのか？」

「興味はあるかな」

そんな話題で話していると、どうやっても理子の胸のほうに視線がいってしまう。でかいわけじゃない。クラスで制服を張り上げるくらいの巨乳の子が一人か二人いたが、それと比べると天地の差が開く。だが、なんというか、その……。

想像しそうになった煩惱を首を振ってかき消した。

「ああああ、やめやめ！ Bくらい、ああ、Bくらいがいいなー！」

「へえ、そうなんだ。私確かBカップなんだよね」

「ダカラナンデスカ！？」

俺を誘っているのかこいつは。揉んでいいのか、揉んでいいんだな？

そんなことを思いつつも勿論手など出せるわけがなく、俺は理子の純粹さが生み出す重圧によって机の上に突っ伏した。

「なあ理子。これもお前の言う「友達の形」ってやつなのか？」

「何よ突然。なんか変だった？」

「いや、変じゃあないんだ。確かに変じゃあない。友達同士でグラビア雑誌を読むこともあるだろう。胸の話をすることもあるだろう。でもな理子、お前は女だ」

「だから何よ」

ここまで言っても分からないかこの御仁は。

「俺が困るんだよ、そういう話題を振られると」

「なんで」

「なんでってお前、そりゃ……」

「……………」

意味するところに気づいたのか、理子は胸元をばつ、と両手で隠し、凄じ剣幕で迫ってきた。

「え、えーいち君。そういう思考実験は良くないと思う！」

「してねえよ！ 何だよ思考実験って！」

「私は好みを聞いてただけなのに、なんでそんなこと考えてるのよ！」

「いや普通に考えるだろ！ お前はいいかもしれないけど俺は男だぞ」

「じゃあえーいち君は、前に私が好きな食べ物聞いた時に納豆って答えてくれたよね。その時にもえっちな事考えてたの！？」

「それはねえよ！」

「ほら！」

ほら、って何だよ。何で俺を論破したかのように勝ち誇ってるんだこいつは。

俺と理子はしばらく互いに睨み合っていたが、根負けして大きくため息をついた。馬鹿らしい、ガキとにらめっこしているわけでもあるまいし。理子がこういう人間だってことは最初から分かっていたはずだ。

「変態」

ありがたいお言葉を頂戴してしまった。後ろを振り返ると、理子は椅子を逆さにして、俺に背を向けて座っていた。その奥から、力

チ、カチと聞きなれた音が聞こえる。キューブだろう。こうなると頑固で、どれだけ話しかけても返事一つ寄越さない。あの小さな背中に塞ぎこんでしまつて、殻から顔すら出してこないのだ。不機嫌モード、またはそれに類する状態だ。

まあ、一時間もすれば元に戻る。とりあえず当面の敵は次の時間の数学をどう乗り越えるか、だ。俺は先生に対する言い訳を考えながら、後ろで鳴っているパズルの音に耳を傾けていた。

FILE：実験最終段階 「???」

居心地の良さを感じる場所。でも、居心地がいいからって、そこにいることが正しいわけじゃない。隔離された世界。他人の入る余地を許さない、自分だけの世界。それが、居心地の良い場所の条件ってやつなんじゃないだろうか。

夏休み前、担任の教師は席替えのことなんて忘れてしまっているのか、俺は相変わらず窓際の席で涼んでいた。蝉の鳴き声にようやく耳も慣れてきた。教師の言葉は何一つ届いてこない。暑い暑いと喚んでいる連中は下敷きをパタパタさせながらも、必死で黒板に嚙り付いている。きっと、何かに集中でもしないと気が狂つてしまふのだろう。対する俺は、ぬるい微風に髪の毛を揺らしながら、机の上で突っ伏して目を瞑っていた。居心地の良い場所というのは、必ずしも正しいとは限らないのだ。

最近の気温は異常だ。日中の気温が四十度越えなんてことを聞いた日には、本気で学校をサボろうかと考えた。男子からは「女子の透けブラ」がどうのこうのという声が上がっているが、そんなものチェックしてる余裕すらない。

睡眠。そう、睡眠こそ至高。この地獄の時間を俺は飛び越える。期末テストと自分の命を天秤にかけているとするならば、期末テストのほうがジャンプで記録を更新できるくらいには差がある。だから

ら寝る。俺は寝る。

……………。

ふと、後ろに振り返った。

「っ……………」

一瞬だけ理子と目があつた。すぐに顔を伏せ、寝たふりだかなんだか知らないが、そのまま動かなくなる。しばらく様子を見ていたが、俺に気づいているのか顔を上げる事はなかった。

最近の理子は暑さで頭がいかれてしまったのか、俺に刺すような視線を向けてくる事が多くなった。相変わらず「実験」と称した悪魔的な弄びは止めないのだが、回数は減った。強いて言うなら、キープをいじっている様子もあまり見なくなった。この暑さの中でパズルをする気は俺にもないが。

しかし、この状況。理子が俺に反応してくれるならば話は別なんだが、こうも尻の隠せていない隠れ方をされると、暑さ以外の理由があるとは思えない。

観察。

考えられるのはこれだ。自称論理的人間の理子は、相手の観察を怠らない。「実験」の一環と考えるのが一番妥当か。ただ、俺にそれを言い出してこないということは、いつもの実験とはちよつと違うのだろう。俺にバレてはいけないことが条件。

隠し事、だろうか。

大したことではなかったにしても、理子が俺に隠れて何かをしていることだけは間違いない。とは言え、こうまで頑なに門を閉ざされてはどうしようもない。やはり内側から開けてもらうしかないだろう。

聞き出すんだ。「実験」とやらの全貌を。

放課後、理子は罫にかけるまでもなく、思わぬ方向から攻撃を仕

掛けてきた。

理子との帰り道は、学校から数百メートルほどにある橋で別れることになっている。俺は橋の下へ降りていき、理子は橋を渡る。理子と帰っているといっても、実際の時間は十分もない。実験のことを聞くのは明日でもいいだろうと思っていた矢先のことだった。

学校を出てすぐに、理子とはとんでもないことを言い出した。

「……手、繋いでも、良い？」

消え入りそうな細かい声だったが、確かに聞こえた。それも、いつものような圧倒的な理不尽さは無く、どこか遠慮の混じった小さな声だった。うつむき加減で視線を一切合わせようとしない。ただ、そこから一步も動かないことが俺の返答を待っているということの証明になる。

「なあ理子、それはいつもの実験ってやつなのか？」

「……うん」

歯切れが悪い。いつもの理子だったら、俺の手を取って突然歩き出してもおかしくないはずなのに。ちらちらと俺の手を物欲しそうな目で見てくる。その仕草に、激しく胸が締め付けられる。自分の手に嫉妬をしてしまいそうだった。

「お前さ、実験実験って毎回言ってるけど、一体何を知ろうとしてるんだよ」

「……ジグソーパズルのピース埋め。およびその試行錯誤」

「そんなこと聞いてない。何を知ろうとしているのかって聞いてんだ」

「………」

だんまり。

「答えられないのか」

「違う。ただ、どう言ったらいいか分からないだけ」

「そのパズルとやらを埋めるために、手を繋ぐ事が、必要だって？」  
「うん」

嘘はついていなさそうだ。

勿論、俺だって理子と手を繋ぐことを嫌っているわけじゃない。

むしろ女の子と手を繋げるのならこっちからお願いたいくらいだ。でもそれは、理子の言う「ともだち」ではない。絶対にない。今まではまだ言い訳が利いた。でも、手を繋ぐという行為はダメだ。それはもう、友達じゃない。

思えば、いつだってそうだった。理子の言う「実験」とやらは、俺との距離を縮めようとするようなものばかり。俺が勘違いしてしまってもおかしくない内容ばかりだった。俺は空気を大きく吸って、息を整えた。

「理子、お前さ、俺のこと好きか？」

「え——」

やっと顔を上げたと思えば、今にも崩れ落ちそうで、ボロボロな表情をしていた。

「変な意味じゃない。ただ単純に、お前がいつも俺に聞いてきた好き嫌いの問題だよ」

「……………どちらかと言えば、好き」

「なら止めよう。さ、帰るぞ」

「ちょ、ちよつと待ってよ！ い、嫌なの？ 私と手を繋ぐのが」  
握りこぶしを作って、訴えかけるように理子は言った。

「嫌なわけないだろ。断る理由なんか無い」

「じゃ、じゃあ……」

「でもな理子、お前にその勇気があるか？」

「え、ゆ、勇気……？」

「そう。勇気」

言っていて吐き気がした。理子に手を差し伸べて、身体中がしびれた。心臓が異様なまでに鼓動を打ち、膝は笑って今にも折れそう。背中から肩にかけて寒気もした。何が「勇気があるか」だ。勇気が無いのは俺のほうだ。今こうして理子を待っている間にも、本当に手を握られたらどうしようという不安の念でいっぱいなのに、無駄に威勢だけよくて、結局のところはただのチキンだ。手を引っ込め

ないだけましの、臆病者。

理子は、俺の手を一度は取ろうとした。でも、指先が触れそうになる寸前でとまった。俺も、そこからは一ミリも動けなかった。見る見るうちに理子の瞳には涙が溜まり、あっと思った時にはあふれ出していた。

「出来ない……っ。無理っ……！」

握れるわけが無い。俺も、理子も。

居心地の良い場所であっても、そこにいることが正しいとは限らない。例えそうだと気づいたとしても、その場所から抜け出すのは少し苦労がある。そこが一番楽でいいから。あの窓際の席は、一番楽でいられる場所だから。時折風が吹いて、雨の日は少しうるさくて、校庭にいる生徒を見下ろしたりすることが出来て、町並みを眺めることも出来る。

そして、後ろにはいつも理子がいた。あの席を移動せずに会話が出来る、唯一の人間。通称、「ともだち」。ルービックキューブなんていう奇妙なものから始まった関係だからだろうか、ただ凹に凸をはめ込むような関係ならよかったのに、俺と理子は失敗した知恵の輪のごとく、複雑難解に絡み合った結果くっついてしまったリングのようだった。

外し方が分からない。俺にも理子にも、分からない。

法則という道筋から外れた場所で出来上がった関係。

解法が分からない。俺にも理子にも、分からなかった。

泣き崩れた理子に近寄って、頭を撫でてやる。夏の日差しが黒髪に熱を持たせていた。さらさらした髪の毛が手のひらを滑る。こんなことは出来てしまうのに、手を繋ぐ事だけは出来ない。

だって、俺たちは友達だから。

理子の思う、ともだちという関係を築き上げてしまったんだから。

夏休みの間、理子とはたったの一度も顔を合わせなかった。そもそも学校以外で遊ぶような約束を取り付けたこともないし、考えてみればメアドも知らない。家も多分そんなに近くないだろうし、顔を合わせる機会なんて訪れなかった。

新学期、ようやく理子と顔を合わせて出た言葉は、当然のように「久しぶり」だった。その後、俺たちの間に会話は無い。授業の準備をして、窓の外をじっと眺める。

酷い空気の味がした。粘つくような風、冷めた風呂のような気温、劈くような蝉の鳴き声。どれもこれもがうざったらしくて仕方が無かった。この場所は、そんなところじゃなかったはずなのに。

カチ、カチと後ろから音が鳴る。理子がキューブをいじっている。思えばこの音も懐かしい。夏休みの間、パズルなんて一つもしなかった。一学期の最初、はまり込んでいた自分が嘘のように、俺はパズルに対して興味を失っている。書店に寄ってもクロスワードパズルなんかには目も留まらない。大体、最初からそこまで好きでもなかったんだから。

HRが始まると、先生が席替えを提案しだした。新学期だし、気分を一新するために席替えなんてどうだろうか、と。もちろんクラス奴らは全員賛成。不満を漏らしていた奴もいたが、多分口だけだろう。結局全員くじを引かされて、黒板に書かれた番号の場所に移動する事になった。

結果、俺は一つ後ろの席に移るだけだった。窓際の一番後ろ。ちようど、理子がいた席。俺の前も横も、話したことの無い奴がやってきた。理子は、廊下側の席に移っていた。

退屈だった。

女々しく弱った俺の精神は、俺をこの席に縛り付ける。居心地の良い、この場所に。

「なあ、数学のノート見せてくんね？」

「はあ？ 自分でやれよ自分で」

「頼むよ花田く。あのハゲ教師の恐ろしさはお前も知ってるだろ？」

「俺はやってきた。つまり俺には関係がない」

「クリームパンで！」

「……二個だ」

「……ちきしょう、背に腹は代えられねえ、いいだろう、クリームパン二個で手を打とう」

「ほらよ。途中式の解説は面倒だからしねえぞ」

「おお、持つべきものは友だな。大丈夫、答えが分かればなんとかなる」

木戸という、前の席の男子に数学のノートを渡した。毎回のように課題を忘れる男で、そのたびに俺は昼食代金を浮かせている。悪い奴じゃないが、どうにも好きになれないタイプの男。まあ、単純にこいつがモテるからって理由で妬ましいだけなのかもしれないが、外は大降りの雨だった。朝はそれなりに晴れていたが、天気予報通りに午後から雨。降水確率八割もいつていれば、さすがに外はしない。本格的な夏も終わり、季節は秋にさしかかろうとしている。クラスでもちらほらと長袖を着てくる奴が出てきた。この窓際の席も、そろそろ寒い季節だ。毎日のように開けていた窓も、最近は閉め切っている。秋雨というやつか、最近雨が多いのも理由の一つ。冬になったら暖房の近くに席を変えたいところだ。

今日もつつがなく一日が終了。俺は大きく背伸びして脱力した。

「じゃあな花田」

「おう」

木戸がどこかへ駆けていく。多分いつもつるんでいるメンツと遊

びにでも行くんだろう。この大雨の中ご苦労なことだ。俺は机の横にかけてあるカバンを手に取り、教室を出た。

階段を降りてすぐ、玄関で靴を履き替える。下駄箱の横にある傘立てから自分の傘を取って、学校を出ようとした。

「……………」

理子がいた。雨で足止めされたのか、扉の前で手元をせわしく動かしていた。傘は持っていない。持っているのは、ルービックキューブだ。相変わらずの速さでキューブの色を合わせていく。十、二十、三十。完成。また適当に崩して、いじり始める。

声をかけるべきか迷った。いや、多分正解は迷わずに素通りすることだった。一瞬でも迷ってしまった時点で俺の負けだった。二度目のルービックキューブが完成する前に、俺は理子の横に立って傘を差した。

「この分だと、雨止まないぞ」

誰かに声をかけられるとは思っていなかったんだろう。理子はびくつと身体を震わせて飛びのき、伺うように俺のほうを見上げた。

「入れよ。送って行ってやるから」

「えーいち、君……」

久方ぶりに聞いた理子の声。でもそれはいつもの理子とはどこか違って、思わず逃げ出したくなった。

「いいよ。止まないようだったらお父さんに電話するから」

「お前の父親、いつ頃帰ってくるの」

「知らない」

「じゃあ送って行ってやるって。ほら入って、友達だろ？」

胃液が逆流しそうな言葉だった。何が友達なものか。もうそんな関係じゃないってことくらい、分かっているのに。でも、そうと分かっている、この言葉を使わないと理子は折れてくれそうな気がしなかった。このタイミングを逃したら、多分もう、理子と話せない。理子はなんとも言えない、ごちゃごちゃした表情で俺を見上げる。「同じ傘に入るのは、友達がすること？」

一瞬、言葉に詰まる。

「……そうだよ。当たり前だろ。中学の頃は友達とよくやった」

「どちらかが濡れちゃうよ」

「それも醍醐味だ」

動かない。俺は決して動かない。理子が傘に入るまで、絶対に動かない。

次々と帰宅する生徒に横を抜かれていく。雨脚は弱くなる気配を見せず、人の喧騒をかき消してしまうほどに降りしきっている。でも、この雨が止んでしまったら、俺はここから動かなければならない。多分、理子の十歩以上後ろを歩いて、そして橋で別れる。だから、雨よ、止むなよ絶対。

「……実験」

「ん？」

「これは実験。それでいいよね」

なるほど、そう来たか。だがこの際なんでも構わない。俺は理子の頭の上に傘をかざし、

「行くぞ」

玄関の一步先に踏み出した。

若干理子のほうに傘を寄せながら歩く。俺と理子の距離は一步もない。理子も雨に濡れないために寄っているせいか、たまに肩がぶつかる。その度に理子が一瞬立ち止まるが、俺は何も言わない。理子にだって分かってているはずなんだ。これが「友達」と呼ばれる関係の距離じゃないことくらい。

いつもなら別れる橋に到着した。でも今回はそのまま橋を進む。ここからは、俺も知らない道。理子に案内してもらわないと辿り着けない道。

車の通りが多く、信号も多い。橋を降りた道は田んぼ道が続いているために、俺にとっては新鮮な光景だった。一度も立ち止まることなく家に着くのが俺の帰り道なのに対し、理子の帰り道は信号でよく捕まる。きっと理子の家に到着するまでに足元はぐちよぐちよ

になっていることだろう。歩いている街人の中で、俺たちみたいに一つの傘に二人なんて人はどこにも見当たらない。そりゃあそうだろう、今のご時勢、酔狂でも合い傘なんてことはしない。コンビ二で新しく買えば良いんだから。するのはよほどのバカッブルくらい人通りが少なくなってきた。先ほどまでよく捕まった信号も少なくなり、住宅街に入ったらしい。曇り空で町全体が暗いせいか、自動販売機の明かりがやけに目に付いた。傘を差した腕とは逆の左肩が、ほんの少し寒くなってきた。見ると、制服の上に水溜りが出来るほどにはびしょ濡れだった。一応理子のほうも確認しておいたが、あつちは点々とした水跡がある程度で済んでいた。

学校を出てから結構な時間を歩いたが、まだ到着しないらしい。どこにあるのかと理子に訊ねたかったが、訊けるような雰囲気でもなかった。ケータイを開いて時間を確認すると、既に三十分が立っていた。俺の家だったら十五分前には既に帰宅している。こんなに長いなら自転車通学だろうと思いつながら、歩を進めていく。

おかしいと思い始めたのは、それから五分経ってからだった。覚えのある通り、特徴的な屋根をした家、さっき歩いた道とまったく同じ道を五分後に辿っている。理子を見ると、相変わらず俯いたままで何を考えているのか分からない。でも、ここで理子に問い詰めたらいけない。理子の顔を俺が上げさせてはいけない。そう思つて、そのまま理子の歩調に合わせて俺は歩き続けた。

沈黙がようやく破られたのは、一時間以上が経ってからだった。

「解けないよ、これ——」

「え？」

突然理子は立ち止まり、つぶやくようにそう言った。

「私じゃ、解けないよ。えーいち君……」

雨に濡れてしまって、どんな顔をしているのか判断が出来なかった。でも、諦観して縋り付くようなその声が、如実に理子を物語っていた。

「分かんない。全然分かんない。教えてよ、えーいち君」

「教えてって、何を……」

「分かんない！」

混乱していた。分からないのは俺のほうだ。理子は何を求めている、俺は何を答えればいいのか分からない。焦りが、苛立ちが、理不尽な要求が、俺を一層混乱の奥底へ導いた。

「私とえーいち君は友達だよね？」

「そうだ。友達だ」

「でも、違うよね？」

「――」

理子がまっすぐな視線を投げかけてきた。目が離せない。杭に打たれたように、もはや逃げることは許さないとでも言うように、理子の問いが俺を打った。

「さっきから、心臓のどきどきが止まらないの。えーいち君と肩が触れるたびに心臓が跳ねるようになって、まともじゃいられないの。えーいち君、傘に入るのは友達として当たり前って言ったよね？」

「ああ、当たり前だぞ」

「嘘。嘘ついてるよえーいち君は。だって、友達だったらこんな風にならない！ 学校を出たときからおかしかった。ううん、おかしかったって意味ではもつと前から、ずっと前からおかしかった。ねえ、教えてよえーいち君、これは何なの？ ということなの？」

「それ……は」

「これが――愛情なの？」

自惚れでもなんでもない。こんな風に言われたら、俺にそれ以外でどう解釈しろっていうんだ。理子は俺を好いてくれている。もうそう思うことでしか、俺は目の前の現実と目を合わせられない。俺と理子は友達じゃない。やってきたことのほとんどが、友達のように見えて、明らかに違っていた。

でも、でもっ！

だからと言って、理子に言えるのか。お前は俺のことが好きなんだって、友達としてとか人間としてとかじゃなくて、理子の言う「

愛情」なんだって俺が断言することが出来るのか。出来るわけがない。俺は理子じゃない。間違っているかもしれない。理子の抱いている感情は、俺に対する好意じゃないかもしれない。その不安をどう拭えと。そんな強靱な自信をどうして持てるっていうんだ。

どう答えれば良い。

いや、どう答えても俺は理子を騙す。理子の望む最良の答えにはどうやってもたどり着かない。答え、られない。

「うう……」

刺すような頭痛が頭部を貫き、俺は傘を落とした。雨が首筋をつたって背中まで入ってくる。でも、身体が持った熱は一向に冷める気がしない。

そうだ。俺は何を自惚れていた。まるで自分だけが答えを分かっただよな気で、何を自惚れていた。分からないのは俺のほうだ。何も分かっていないのは俺のほうなんだ。

何を答えようとしていた。理子は俺が好き？ それを相手に認識させたとして、俺はどうしていた。

自分の気持ちも分からないで、一体何を答えようとしていたんだっ……！

「友達って、どうやったらなれるのかな……」

雨に流されて消えてしまいそうな声で理子が言った。

「やっぱり難しいよ、友達なんて。私には」

違う。俺と理子は確かに友達だった。形こそ歪んでいたかもしれないが、確かに友達だったんだ。難しいことなんて何も無い。休み時間に話したり、くだらないことで盛り上がったたり、趣味を共有したり、橋のところまで一緒に帰るくらいでよかったんだ。そう言っただけなのに、喉の奥に何かが詰まったかのように言葉は何一つ出てこない。

「一学期の初め、えーいち君に声をかけた時さ、これでも頑張ったんだよ私。クラスでルービックキューブなんてしてる人初めて見て、もしかしたら私と一緒にの人かもしれないって思って、頑張ったんだ

よ。友達、欲しかったの。パズルをしている時は、いつも世界に自分一人だけだった。そこに誰かが一緒にいてくれたって、いつも思ってた。でもね、実際にえーいち君が友達になってくれて、少し経って気づいたの。私、パズルをするよりもえーいち君と話している時のほうが楽しいって。これ、おかしいよね」

理子は自嘲するような笑みを浮かべて言う。

おかしいところなんて何一つ無い。気が狂ってしまいうくらいよくある話で、笑い飛ばせるほど普通の話だった。

「お弁当を作ってきた時さ、えーいち君、それは愛情の表現だって言ったよね。私、あの時よく意味が分からなかった。私はえーいち君と「ともだち」をしたかっただけなのにそういうこと言われて、分からなくなっただ、自分のしていることが。だから、実験することにしたの。愛情ってどういうものなのか知るために」

あの時、俺が弁当を受け取ったか受け取らなかったかで変わった現在。あまりにも難解な式で描かれたこのパズルに、俺は顔を上げる事が出来なくなっていた。

「でも、分からなかった。ううん、見つけることは出来たのかもしれない。でも、私は今の自分が持っているこれを、「愛情」って言うていいのか分からない。だから、教えて欲しいの。えーいち君に簡単な定義付けだった。ただ、曖昧なものに確かな言葉が欲しいだけの実験。

「これで終わりだから。実験、これで終わりにするからっ……」

縋るような声が胸に突き刺さる。

「迷惑だったよね、ごめんね本当に」

「迷惑なんてそんなことは……」

「だって、えーいち君はいつも困った顔をしてた」

否定できない。理子の実験はいつだって俺を困らせていた。でも、迷惑した覚えなんて無い。それも含めて、理子と俺は友達なんだと思っていた。

「お弁当なんて勝手に作ってきてごめんね」

違う。

「名前で呼べなんて言っでごめんね」  
違う。

「手を繋ごうだなんて言っで、ごめんねっ……」

「違うっ！」

ようやく喉が震えた。ようやく顔を上げられた。雨の中でもわかるくらい、理子の顔は涙でぐちゃぐちゃだった。こいつが悲しまなきゃいけないことなんて何一つ無いのに。

「何も違わないよ！ 私が勘違いしてたから、えーいち君に迷惑が……」

「勘違いだと？ 何を勘違いしたんだ。俺とお前が友達だったってことが、勘違いだって言うのか？」

「じゃあ、私のこの気持ちは何なの？ 答えてよ、えーいち君」

理子の冷たい手が俺の腕を掴んだ。爪が食い込むほど強く、痺れるほど冷たく熱を奪っていく。でも、どれだけ熱を奪われても、今の俺から言葉を失わせるほどにはならない。ぐつぐつと胸の奥で煮えたぎるものは、怒りに似たもの。

俺と理子は友達だ。それは揺るぎ無い事実。勘違いだなんて、絶対に言わせたくない。でも、でもっ。

その瞬間、吐き出そうとした言葉から急速に熱が奪われ、俺は何かに流されるがままに言葉を発した。

「……愛情だよ」

言ってしまった。抑えていたものが、押し出されるように出てきてしまった。

「……本当に？」

「これ以上聞くな」

「……そっか」

互いに、それ以上喋ることが出来なくなった。雨の音だけがやけに五月蠅く響き、例え何かを話したとしても、きつともう聞こえない。俺も理子も、雨を避ける必要がなくなるくらいにぐしょ濡れに

なっている。

手を繋ごうと理子が言ってきた日のように、どれだけごちゃごちゃになっても最後に差し出せる手があったなら、どんなに良かっただろう。俺の腕は理子によって食い止められている。言葉も無ければ、行動も起こせない。逃げることも出来なければ、進むことも出来ない。

「ありがとう」

理子が手を離れた。そして、一步を踏み出した。

「待てよ」

俺のすぐ横、肩がぶつかる距離で理子が立ち止まった。どうして引き止めたのか、俺にもわからない。ただ、その「ありがとう」は、聞き流しちゃいけない言葉のような気がして、その真意を確かめずにはいられなかった。

「なあ、俺たちは友達だったよな？」

卑怯だと思っても思う。でも、理子がどんな回答を導き出しているとしても、こいつと出会ってから過ごした日々が、間違っていたんじゃないかってことだけは、認められなかった。

しかし。

「違うよ」

理子はそう答えた。

「えーいち君が私を友達だと思ってくれたなら嬉しい。でも」

おかしい。そこで、その表情はおかしい。振り返った理子は、まるで別人のようで、俺の知っていた、気さくで理不尽な理子じゃなくて、友達だった頃の理子じゃなくて。

「私にとって、えーいち君は友達じゃなかった。ごめんね」

言って、理子は嬉しそうに笑った。

過程が分からなければ、完成形に意味などない。当てはめてみた答えは残酷なほどにきっちりハマっていて、まるで正解を導いたかのように答えを見せびらかして。

でも、その意味は全然分からなかった。

それでも確かめたいから少しずつ逆算していつて、たどり着いた問題文に絶望した。そうなってしまっただけではもう遅くて、初めにどんな形があったのかは既に忘れていた。俺と理子は元の関係に戻る事すら難しく、解けない知恵の輪を無理矢理引き剥がすようにしてしまっただけで、壊れて直らなくなった。

結局、何が正解だったのかは分からない。あの時、俺が黙っていたのなら何かが変わっていたのだろうか。それもよく分からない。ただ一つ言えるなら、答えは出ていなくて、俺が持て余したパズルのピースはどこにも埋められることなく、ずっと手のひらの中だった。

■

FILE：証明 「ロジカルキューブは回り出す」

トイレで化粧直しをして、再び会場に戻ってきた。恥ずかしいことに、顔も知らない同級生に肩を貸してもらい、女子トイレの中では色んなことを洗いざらい吐かされた。相変わらず、女の子はこの手の話題に敏感だった。私は私で、恥も外聞も無くぺらぺらと喋っ

てしまった。泣いていたせいもあるんだろう、彼女たちはやけに親身になって話を聞いてくれて、えーいち君は会場の端で女の子たちに何やら攻められていた。後で謝っておこう。

本当は、全部分かっていた。

あの時、私は自分の気持ちをぶつけることに精一杯で、実験によって理解した様々なことを何一つ伝えられずにいた。

私はえーいち君が好きだった。大好きだったって言っても過言じゃない。えーいち君と最後に話したあの雨の日、疑念は確信に変わった。相合傘なんて、どう考えたって友達のやることじゃない。私はえーいち君とぎくしゃくしていたから傘に入るのを躊躇ったわけじゃない。単純に恥ずかしかった。いざ傘の下に入ってみたら、もう私は顔を上げることすら出来なくなった。数分で家に到着してしまっただけ、私はそれを告げることが出来なかった。

きつと、ここで別れたら、もうえーいち君と話すことはないだろう。そんな予感があったから。

だから私は歩き続けた。ほんの少しだけでいいから、一緒にいる時間がほしかった。

でも、時間が経てば経つほど、私の中にたまっていたあらゆるものに火がついて、そのうち涙も止まらなくなっていた。本当は答えなんて欲しくはなかった。友達かどうかなんてどうでも良くて、ただえーいち君と一緒にいられれば、それでよかったはずなのに。

えーいち君は女子から解放されたのか、ぼろぼろになって帰ってきた。スーツが妙に乱れており、一体どんな尋問を受けたのか、想像するだけで恐ろしい。

「お前、一体どんなことを話したんだよ……」

「別に。あったことをそのまま話したただだよ」

「……」

私たちにとって、過去はある種のタブーのようなものだった。そりゃあ、男女の好いた嫌ったの話題なんだから、避けて通りたくないのは当たり前。でも、私とえーいち君の場合はちょっと違う。ど

ちらがどちらに好き嫌いを言ったわけでもないし、私達は付き合っていたわけでもないんだから。

「ねえ、ちよつと外に出ない？」

「良いけど、寒いぞ結構」

「大丈夫、大丈夫」

えーいち君の手を引いて、会場から出た。受付の人が「もう帰るの？」と聞いてきたので、「違う違う、見れば分かるでしょ？」と笑って返しておいた。

会場を出ると、確かに少し肌寒かった。来た時よりも夜が更けているせいか、星が見える程度には暗くなっていた。レストランから少し行ったところに、ワイン工場の中央広場がある。周りを赤煉瓦製で出来た洋風の建物が囲っており、小学校の頃はここでスケッチをした覚えがある。中央に石製の椅子が幾つか設置されており、私たちはその一つに座った。

別に、ロマンチックな演出をしたかったわけじゃない。ただ、今日は雨も降っていないし、ゆっくり話すには静かな場所が欲しかった。

「その、元気にしてた？」

出てきたのは、なんでもない無難な話題だった。えーいち君のほうを見ると、タバコに火をつけていた。

「ぼちぼちな……あ、タバコ気にする？」

「ううん、別に。でもえーいち君、タバコ吸うようになったんだね」「職場の先輩にな。別に好きでもなんでもないんだけど、なんとなく吸っちまうんだよな」

「ふうん、男らしさポイントでも加算しておこ」

「なんだよそれ……」

タバコの匂いは私も職場で嗅ぎなれている。大人になれば、嫌でも染み付くにおいの一つだった。

「格好よくなつたよね。結構見違えちゃった」

「お前は相変わらずだよ」

「どういう意味よそれ。化粧するようになってから、結構変わったと思うけど」

「まあ最初は分からなかったけどな。ただ、同窓会の席でルービックキューブいじってるような奴なんか、お前くらいしかないし」

「それは……」

分かってはいたけれど、やはり見られていたらしい。それでもキューブをいじったのはかなり久しぶりなのだけど、持って来てしまったのは懐かしさからだろうか。バッグからキューブを取り出す。これが、すべての始まり。私とえーいち君の、唯一の繋がりだった。

「貸してみろよ」

「えっ……良いけど」

えーいち君はキューブを受け取ると、六面を念入りに確認し始めた。私はそれだけで息を呑んだ。ルービックキューブの早解きの際に必ず行う確認。

論理的な考察、しつかりとした観察、類似例の経験則。パズルを解く際に必要な要素の一つ。

「時計見てろよ」

「わ、分かった」

えーいち君の指がキューブを弾き始めた。昔のキューブの色に踊らされるように回っていた動きとは明らかに違う。正解の道のりを知っている、答えを導き出すための動き。

そこからはあつという間だった。六色全てが揃い、えーいち君は椅子の上にそれを置いた。時計を見る。きつちり三十秒。学生時代の私の全盛期レベルだった。

「言っておくがな、超練習したんだぞ」

「……………分かってるよ。言われなくなつて、分かるよ」

「おい……お前、また」

鼻がつんとして、目の前がぼやけた。どうして涙が出てきたのか、私にも分からなかった。ただ、なんとなくだけど、ずるい気がした。

「卑怯」

「……悪かったな、卑怯で」

「どのくらい練習したの」

「忘れた。大体、このくらいで出来るようになったのは結構前だしな」

言つて、タバコを吹かして空を仰いだ。格好つけるつもりなんだろうか。思わず笑つてしまった。

「えーいち君さ、彼女でも出来た？」

「な、何でだよ」

「いや、タバコの吹かし方とかさ、妙に様になつてゐるから。そういう、格好つきたい相手でもいるのかなーって思つて」

「いねえよそんなの。俺は変わらず恋愛弱者ですよ」

「別に卑下しなくてもいいのに」

「うっせ」

こつこつと会話が出来ること。あの日から、ずっと求めていた日常壊れてしまった二本のリングが、ようやく重なるくらいには直つてゐるような気がした。

一度深呼吸をする。本当は、余計なことは言いたくない。このままメールアドレスとか交換して、たまに会つたりして、笑いながらお話出来ればそれで構わない。でも、それはきっと本心じゃない。回り出したキューブには、もう逆らえないし、逆らいたくない。昨日まで凍り付いて動かなかったそれは、ようやく私を動かしたのだから。

「実験したいんだけど、いいかな」

「……聞いてやるよ」

「私さ、ここ十年で色々考えて、色々なことが分かつたの。自分で言うのもなんだけど、あの日よりもずっと、ずっと大人になれたと思う。でも、それでも分からないことは幾つかあつて、それはどうでもいいことだったり、そうじゃなかったりする。でね、一つだけ聞きたいの。深く考えなくてもいい。単純な、好き嫌い問題」

私だけでは解けない、あの日からずっと続いてきた問い。難しく

考える必要なんてどこにもないのに、やけに欲しがってしまった答え。論理的な思考は、曖昧な答えを決して許そうとはしなかったから。

「いい？」

「おう」

ロジカルキューブは回り出す。答えに導かれるように。

「えーいち君は、私のことが好きですか？」

## （後書き）

この小説は、発想の元として、ボーカロイドの楽曲を利用しております。くちばしPの「どういうことなの!？」という曲の歌詞、PVを元に解釈を加え、物語を構成しています。そのため、完全なオリジナルではなく、一応二次創作扱いとさせていただきます。

とは言え、完全にファンフィクションかと問われるとそれもなんか違うので、一応オリジナル作品として投稿し、タグに「二次創作」と入れさせていただきます。ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6222s/>

---

ロジカルキューブは回り出す

2011年4月22日01時10分発行